

公益財団法人地域社会振興財団 調査研究事業参加の勧め

地域の課題に根ざした研究が未来を切り拓く

愛媛大学医学部附属病院地域支援センター（市立西予市民病院スーパーバイザー）

川本 龍一（自治医科大学卒業 8期生）

公益財団法人地域社会振興財団は、都道府県が中心となって長寿社会づくりを推進する際に、地域の特性を活かした独自の事業や、新たな分野への挑戦を後押しするため、必要な費用を交付金として支援しています。その一環である「調査研究事業」は、特に医療資源が限られたへき地などにおいて、地域住民の疾病特性や病態生理、さらにはその背景にある要因を明らかにし、地域に根差した有効な対策を導き出すための重要な基盤となっています。加えて、この事業は、高齢化や少子化といった社会構造の変化に対応する保健・医療・福祉政策の基盤となる実証的な研究も広く支援しており、まさに現場の声を政策へとつなげる橋渡し役を果たしています。

私自身、医師として地域医療に従事する中で、地域住民と向き合いながら進める研究の奥深さと面白さに魅了されました。義務年限中からこの財団の調査研究事業による支援を受け、臨床の現場に即した研究を継続してきました。その成果として、これまでに多数の学術論文を発表することができ、卒後13年目には、「病気対処行動に関する研究」により、自治医科大学から博士号を授与されました。

限られた資源の中でも、地域に根差した課題解決型の研究を継続できるのは、このような財団の制度的支援があつてこそです。自治医科大学卒業生をはじめ、地域医療に携わる多くの医師たちにとって、この制度は地域社会とともに歩むための大きな力となっています。地域での臨床経験を研究というかたちで社会に還元し、実際の政策や医療体制の改善につなげていけることは、大きなやりがいであり、未来に向けた希望でもあります。現場の声を科学的に昇華させ、地域の健康と福祉の向上に資する本事業の魅力を、ぜひ多くの方に知っていただきたいと思います。

以下、2023 と 2024 年度に発表された研究成果の一部をご紹介します。

地域在住の高血圧患者において血清尿酸/クレアチニン比は全死亡の有用な予測因子である

Kawamoto R, et al. Serum uric acid to creatinine ratio is a useful predictor of all-cause mortality among hypertensive patients. *Clin Hypertens* (2023) 29:10

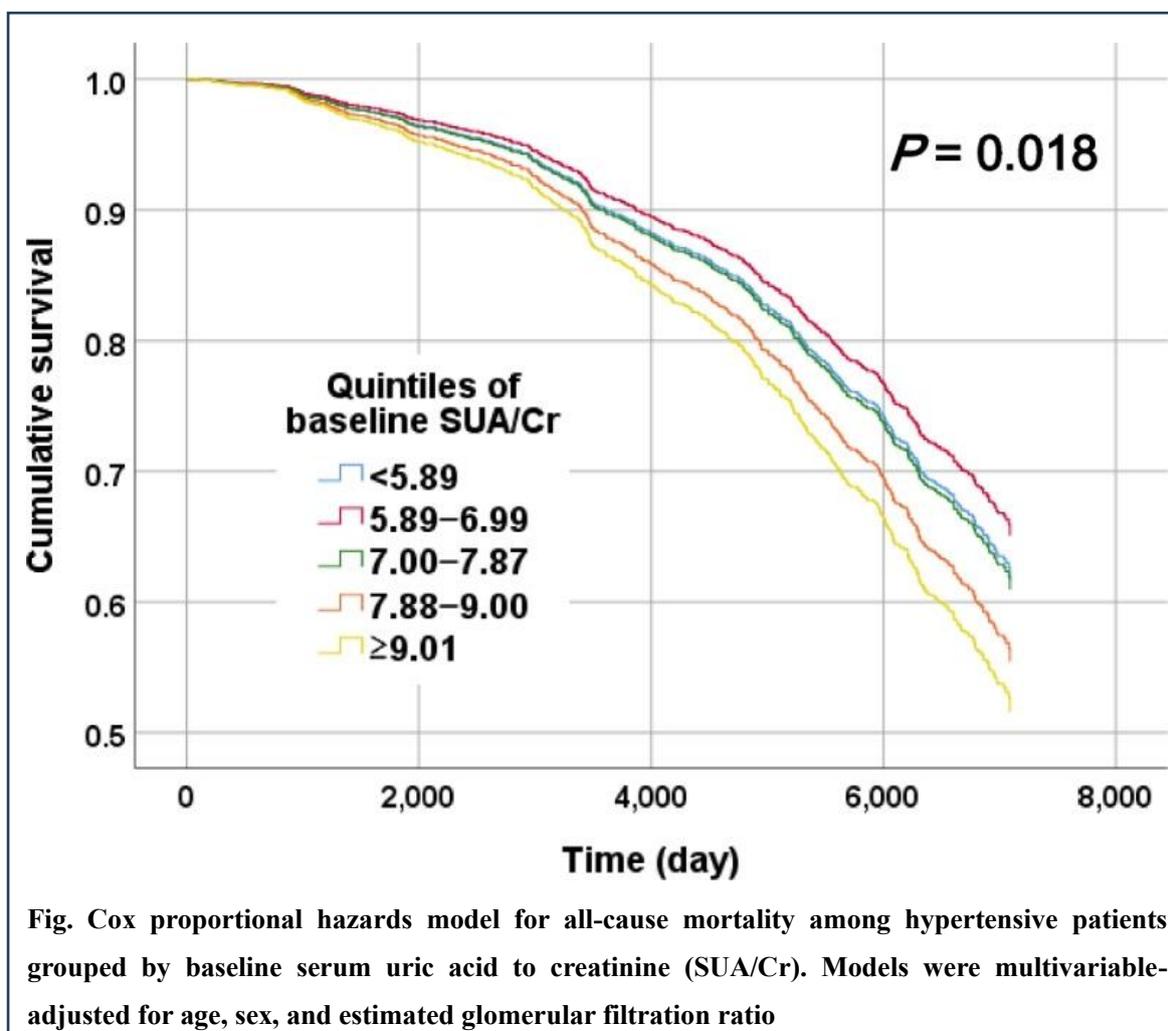
【背景】 既存の研究の多くが、血清尿酸 (SUA) が腎疾患進行の予測因子であることを示している。さらに最近の研究では、腎機能正常化 SUA (SUA/Cr 比) と成人の全死亡率との関連が示唆されている。本研究の目的は、SUA とクレアチニンの比 (SUA/Cr 比) と全死亡率との関連を検討することである。

【方法】 対象は、2002 年 (第 1 コホート) および 2014 年 (第 2 コホート) に参加された野村コホート研究の高血圧者で、追跡期間を通じて参加を継続した (追跡率は各コホート 90.3% および 97.4%) 男性 916 人 (67 ± 11 歳) および女性 1,101 人 (69 ± 11 歳) である。Cox 比例ハザードモデルを用いて、潜在的な交絡因子で補正したベースライン時からフォローアップ期間までの死亡率の多変量調整ハザード比 (HR) と 95% 信頼区間 (CI) を求めた。

【結果】 全参加者のうち、639 人 (31.7%) が死亡し、そのうち男性が 327 人 (35.7%)、女性が 312 人 (28.3%) であった。ベースラインの SUA/Cr 比の五分位間における全死亡の多変量調整 HR (95% CI) は、男性で 1.28 (0.91-1.80)、1.00、1.38 (0.95-1.98)、1.37 (0.94-2.00)、1.57 (1.03-2.40) であり、女性では 0.92 (0.64-1.33)、1.00、1.04 (0.72-1.50)、1.56 (1.06-2.30)、1.59 (1.06-2.38) であった。さらに年齢 (< 65 または ≥ 65 歳)、体格

指数 (<22.0 または ≥ 22.0 kg/m²)、推算糸球体濾過率 (<60 または ≥ 60 mL/min/1.73 m²)、SUA 低下薬の有無のいずれにおいても、全集団と同様の傾向がみられた。

【結論】 ベースラインの SUA/Cr 比は地域住民の高血圧患者における死亡リスクを予測しうる独立した因子である。



日本人地域在住男性において太腿/ヒップ比は全死亡率の有用な予測因子である Kawamoto R, et al. Thigh-hip ratio is significantly associated with all-cause mortality among Japanese community-dwelling men. PLoS ONE 2023; 18(10): e0292287.

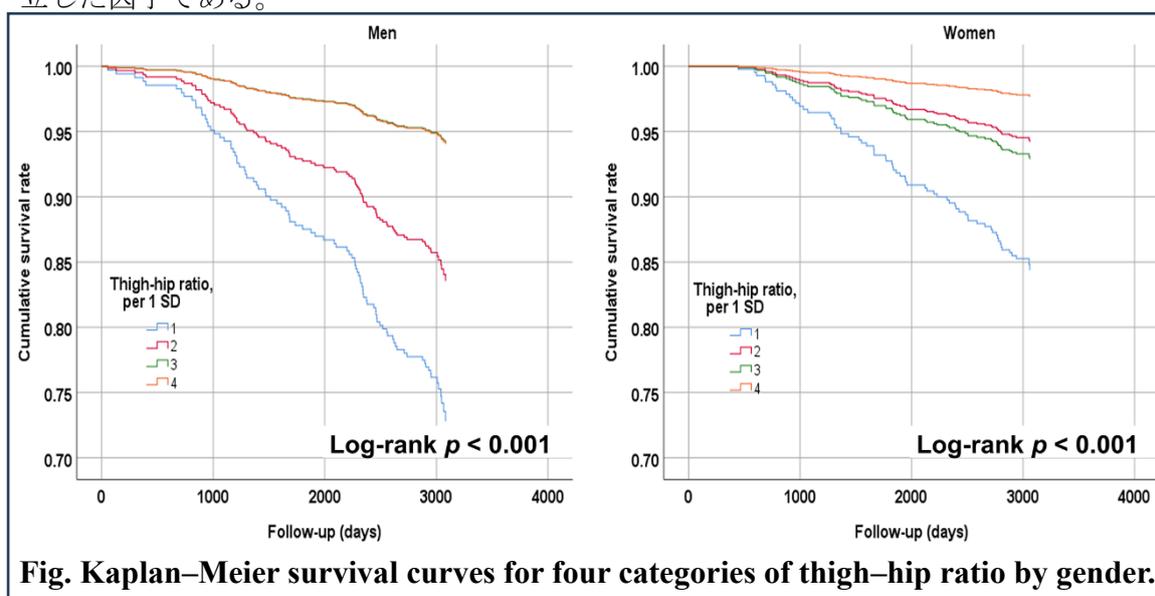
【背景】 人体計測評価は、加齢における生命予後を研究する上で、筋肉量と脂肪量の単純かつ不可欠な指標である。本研究では、体格指数とは独立した体格測定が、全死亡率にどのように寄与するかを調べた。

【方法】 2014年（第2コホート）に参加された者のうち、その後8年間の追跡調査に参加した1,704人のデータを調べた（追跡率：93.0%）。そのうち765人が男性（69±11歳）、939人が女性（69±9歳）であった。全死亡は住民基本台帳を参照し、Cox回帰分

析により可能性のある交絡因子で調整し、ハザード比 (HR) {95%信頼区間 (CI)} を検討した。

【結果】 全参加者のうち、死亡が確認されたのは 158 人 (9.3%) であり、そのうち男性 92 人 (男性参加者全体の 12.0%)、女性 66 人 (女性参加者全体の 7.0%) であった。多変量 Cox 回帰分析の結果、男性参加者では大腿/ヒップ比が小さいほど 8 年間の全死亡率が高かったが、女性参加者ではベースラインの肥満度のみが全死亡率と関連していた。

【結論】 大腿/ヒップ比は、日本人の地域在住男性における死亡リスクを予測しうる独立した因子である。



高感度 C 反応性蛋白 (hsCRP) は日本の地方在住者における全死亡の予測因子である

Kawamoto R, et al. High-sensitivity C-reactive protein is a predictor of all-cause mortality in a rural Japanese population. J Clin Lab Anal. 2024;38: e25015.

【背景】 高感度 C 反応性蛋白 (hsCRP) は炎症を検出するマーカーであり、心血管疾患を含む様々な健康アウトカムに関連するとされている。本研究では、hsCRP 値の上昇と死亡率との関連を前向きコホート研究のデザインを用いて検討した。

【方法】 対象は、2002 年に開始された野村コホート研究で 20 年間にわたる追跡調査 (追跡率 93.3%) に参加した男性 793 人 (平均年齢 61 ± 14 歳) および女性 (平均年齢 63 ± 11 歳) であった。全死亡に関するデータは住民基本台帳から取得され、年齢を時間変数とし、交絡因子で調整した Cox 比例ハザードモデルを用いた解析を行った。

【結果】 追跡期間の中央値は 6548 日 (四分位範囲: 6094 日から 7452 日) であり、追跡期間中に 632 名 (34.8%) が死亡した。男性の死亡者は 319 名 (40.2%)、女性の死亡者は 313 名 (30.6%) であった。hsCRP の高値群における多変量調整後ハザード比は 1.27 (95%信頼区間: 1.01–1.59) であった。特に 65 歳以上、BMI < 25 kg/m²、心血管疾患や

糖尿病の既往がない男性において、hsCRP 高値群は全死亡リスクと有意に関連していた。さらに、心血管疾患および糖尿病を有する参加者においてこの関連が有意にみられた（交互作用 $p = 0.004$ および $p = 0.022$ ）。

【結論】 日本の地方在住者において、hsCRP 値は全死亡率の予測因子であることが示された。

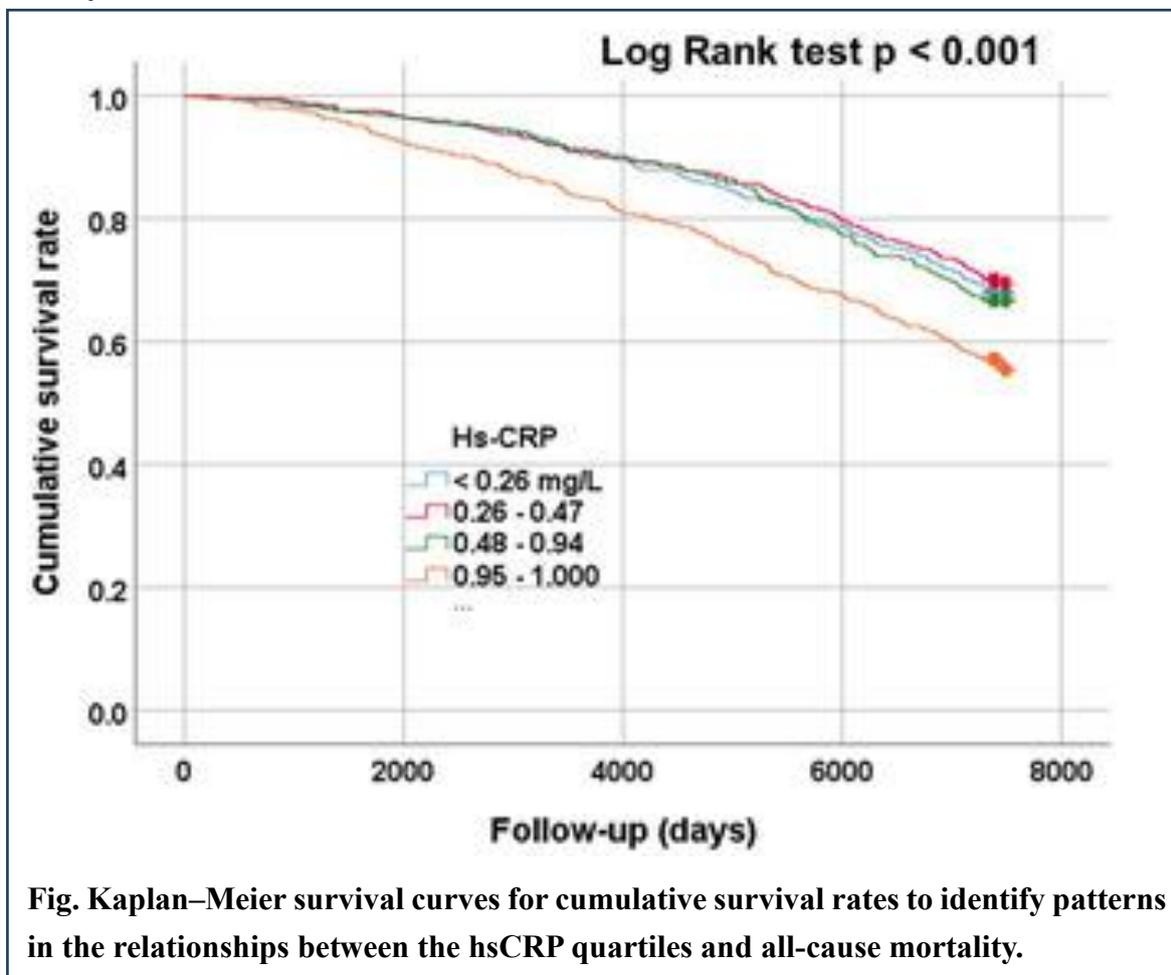


Fig. Kaplan–Meier survival curves for cumulative survival rates to identify patterns in the relationships between the hsCRP quartiles and all-cause mortality.